

疑問文文末形式「否定辞+カ」の意味と用法

カノックワン・ラオハブラナキット

1. はじめに

「飲みに行かナイカ」、「ひょっとして明日雨が降るんジャナイカ」、「なんだ、けっこう軽いジャナイカ」のような「否定辞+カ」は、「非分析的な否定疑問文(田野村1988)」と呼ばれる。否定命題を構成する本来の否定の意味を表す「否定辞」に単純に「カ」が加わった文(「分析的な否定疑問文(田野村1988)」例えば、「[1は素数じゃない]カ。』)とは異なり、「否定辞+カ」形式は否定命題を構成しないので、「否定辞」と「カ」が融合した一つのモダリティ表現と捉えられるのである。

本研究では「非分析的な否定疑問文」を扱うが、とりわけ、ここで取り上げる形式が否定辞を含みながら命題を否定しないという特異な表現形式である点に注目した。「非分析的な否定疑問文」に関して田野村(1988)は主に形態的な面を分析し、体言と用言の両方に接続することができる「ジャナイカ 1類」と体言にしか接続できない「ジャナイカ 2類」があることを指摘した。その指摘を考慮し「ジャナイカ 1類、2類」の持つ用法面に注目した研究に安達(1991、1992)、蓮沼(1993、1995)、三宅(1994、1996)などがある。例えば、三宅(1994、1996)は、「ジャナイカ 1類」には「驚きの表示」「知識確認の要求」「弱い確認要求」、「ジャナイカ 2類」には「推測」「命題確認の要求」といった用法があることを示している。これらの研究はいずれもこのように用法の名前を示し、各用法の特徴を示しているが、何故「ジャナイカ」がこのような複数の用法を持つかといったことに関して言及はない。

また、これらの先行研究では、「ジャナイカ」形式を中心に行っているものが多く、「行かナイカ」のような用言のみに接続する「ナイカ」の形式についてはあまり述べられていない。ところが、「ナイカ」は「ジャナイカ 2類」と同様な用法を持っていて、用言のみに接続する形式であり、「ジャナイカ 2類」は体言のみに接続する形式であると考えることができる。田野村(1988:28)はこれに関して次のような表を示している¹⁾。

甲種	[体言、用言] ではないか 1	(例) よう、山田じゃないか
乙種	[体言] ではないか 2	どうもあの男犯人じゃないか?
	[形容詞] ないか 2	この靴では少し小さくないか?
	[動詞] ないか 2	あの絵傾いてないか?

この表では「ジャナイカ 1類」が甲種、「ジャナイカ 2類」が乙種と呼ばれている。表

から明らかなように「ナイカ」と「ジャナイカ2類」の両者は乙種において形態的に相補分布をなしているのである。このことから「ナイカ」は「ジャナイカ」と一緒に「否定辞+カ」形式にまとめて分析すべき形式であると思われる。本研究では、上記の理由から「ジャナイカ」と「ナイカ」²⁾をまとめて「否定辞+カ」と呼ぶ。そして、「否定辞+カ」が否定辞を持ちながら命題を否定することのない特異なモダリティ表現である点に注目することで、先行研究とは異なった角度の用法分析を試みる。

2. 「否定辞+カ」の意味と用法

「否定辞+カ」は、命題に否定辞を付加しながら、その命題を否定しない。「否定辞+カ」の用法を考えるに当たり、「否定辞+カ」を用いてなぜそのような回りくどい表現をしなくてはいけないのか、「否定辞+カ」の存在理由について考えてみるのが有効のように思われる。これに関しては「単純疑問文と誘導型疑問文の役割分担」という井上(1994)の論考が示唆的である。井上(1994)は、まず命題疑問文(「はい」「いいえ」などの肯定応答辞・否定応答辞で答えられる、いわゆる YES-NO 疑問文)を以下のように分けている。

I : 単純疑問文(非誘導型疑問文)

I a : 単純肯定疑問文(Pカ)(Pは命題)例) この餃子、おいしいですか?

I b : 単純否定疑問文(~Pカ)(~=not)

例) この餃子。おいしくない(=まずい)ですか?

II : 誘導型疑問文

II a : 誘導型肯定疑問文(Pナイカ)例)この餃子、そこそこおいしくありませんか?

II b : 誘導型否定疑問文(~Pナイカ)

例) この餃子、そんなにおいしくないんじゃないでしょうか?

ここで、誘導型疑問文が田野村(1988)の「非分析的な疑問文」で、単純否定疑問文が「分析的な疑問文」である。この分け方からも分かるように、井上は「分析的な疑問文」と「非分析的な疑問文」という対比ではなく、単純疑問文と誘導型疑問文の対比で疑問文を捉えている。そして、単純疑問文は「当該の文脈においては、Pである可能性があることは確かだが、Pでない可能性がある(否定できない)ことも確かである」場合に使われるとして1)のような例を示している。この例では相手が何か落とした可能性があることは確かだが、何も落としていない可能性(例えば、もともと地面にあるものを探しているような場合)もあり、このような場合に1')のような誘導型疑問文は使えない。

1) (腰をかがめて何か探している相手に) どうしました?何か落としましたか?

1') (腰をかがめて何か探している相手に)??どうしました?何か落としましたか?
たか?

これに対して誘導型疑問文は、「当該の文脈においてPの可能性が排除されている」場合に使われる。

2) (何か落としたことに気づかずに歩いていく聞き手に、そのことを教えようとして)

もしもし、何か落としましたか？

2') (何か落としたことに気づかずに歩いていく聞き手に、そのことを教えようとして)

??もしもし、何か落としましたか？

2)では相手の行動様式は「何か落とした」人のそれではない。つまり、聞き手の行動様式において(すなわち、発話の文脈において)は「何か落とした」可能性が排除されているのである。この場合2')のような単純疑問文を使うのは不自然である。単純疑問文はこのようにPの可能性が排除された文脈において、Pの真偽を問題にすることができないのである。そしてそのような単純疑問文の機能的ギャップを補完するために誘導型疑問文がある。すなわち、誘導型疑問文はPの可能性が排除された(真でありうる選択肢の集合にPが含まれていない)文脈でPの真偽を問題にすることを可能にする疑問文なのである。

さて、本研究の「否定辞+カ」は井上の誘導型疑問文にあたる。そして、上述の井上の指摘から明らかなように、「否定辞+カ」はPの可能性が排除された文脈(「 $\sim P$ 」の文脈)において使われる形式である。しかもこの形式は当該の命題Pを否定しない。すなわち、「否定辞+カ」は「 $\sim P$ 」の文脈において、「P」を表現する形式なのである。このことから「否定辞+カ」には次のような意味があると考えることができる。

「否定辞+カ」の意味：「 $\sim P$ 」の文脈において、「 $\sim P$ 」を「P」に変換せよ。

「否定辞+カ」の意味をこのように考えると次に問題となるのが、「否定辞+カ」形式によって発話時に「 $\sim P$ 」はどう捉えられるのか、そしてそれがどのように「P」に変えられているのかということである。「 $\sim P$ 」をどう捉え、どう「P」に変換するか、実は「否定辞+カ」は文脈における初期状態「 $\sim P$ 」の捉え方、および「P」の導入のあり方にいくつかのタイプを持っている。これによって「否定辞+カ」に複数の用法が生まれているのである。本研究ではそのあり方に次の三通りがあると考ええる。

(一)「 $\sim P$ 」の可能性に対する配慮または意識。

「 $\sim P$ 」の可能性が全くないというわけではないといった配慮、または意識があるが、それでもPであると不確実ながら判断できそうであることを示す。「ひょっとして」「もしかしたら」などの副詞と共起することができる。

例) ひょっとして、明日雨が降るんジャンナイカ。

この例では「雨が降らない」(～P)という認識の可能性を完全に排除することができず、その可能性に配慮しながら、それでも「雨が降る」という判断が不確実であるができそうだとすることを表すように発話が行われている。

(二)意識されていなかった「P」の生成。「P」を意識してない＝「～P」

意識されていなかった「P」、すなわち「～P」を発話によって否定し、そのことで話し手/聞き手の中にPの認識が生成される。これは、井上(1994:234)が「『Pである』可能性が意識されていない(知らない、忘れている、特に重要なこととして意識されていない)という想定にたつケース」と呼んでいる場合に見られ、それまで意識されていなかったPの「認識生成」をする用法である。「あっ」「そうだ」などの副詞と共起することができる。

例) あっ、これおいしいジャンナイカ。

この例では「味に関しては重要なこととして意識してない」というように「P」の可能性が意識されていなかった(すなわち「～P」だった)が、発話によってその「～P」が否定され、「おいしい」(P)という認識が話し手の中に生成されている。

(三)「～P」の破棄。

「～P」の可能性が発話時直前まで話し手/聞き手の認識の中にあったのだが、発話によってそれが破棄されるように促す。上記の(二)は発話による認識生成に主眼がおかれるが、(三)では、発話時直前までの認識の破棄に主眼がおかれる。その結果強い調子で「P」という認識を示す用法となる。「なんだ」のような副詞と共起することができる。

例) なんだ、こんな所にあったジャンナイカ。

この例では「こんな所にあった」というその場の体験を認識するために、「こんな所にはない」(～P)という発話時直前まで話し手の中にあった認識を発話によって破棄しているのである。

以下では、このような「～P」に対する捉え方を中心に考慮して、次のような「否定辞+カ」形式の七つの用法を提案する。

I 内向き不確実判断提示 II 外向き不確実判断要求 III 内向き認識提示
IV 外向き認識提示 V 外向き認識要求 VII 内向き認識主張 VII 外向き認識主張
各用法の名称は相互の関係ができるだけ分かりやすいように工夫した。以下、上記の三つの「～P」の捉え方に従い、これらの用法を2.1不確実判断、2.2認識生成、2.3認識主張の三つに分けて考える。

2.1 不確実判断

ここでは「～P」の可能性に対する配慮または意識を表している「否定辞+カ」の用法を取り上げる。まず例を見る。

3) 「国際的な規制が進みつつあるが、手ぬるいし、手遅れになるんジャンナイカ。日本の対応はとくに遅い」と教授は憂えていたそうだ。(朝日)

4) そして市民の過半数は「受け入れられない」という意思を明らかにしたわけだ。
従来の日本的感覚でいくと「もうそろそろ手を打つしかないのジャナイカ。国と
県を相手にして最後まで突っぱっても」と、あきらめに傾くところだろう。(朝日)

3)、4)の例ではそれぞれ「手遅れになりはしない」「まだ手を打たなくてもよい」と
いった「～P」の可能性を意識しながらも「手遅れになる」「もうそろそろ手を打つしか
ない」という判断をしなくてはならないことが表現されている。とりわけ、4)の例では
「～と、あきらめに傾くところ」という表現が後接されていて、「～P」を意識しながら
も「P」の方へ判断が傾きつつある過程が読みとれる。対話の形で次のような例もあ
る。

5) 「ヒロシ、顔色が悪いわよ。ごはん食べてないんジャナイ?」

「ああ、どうしても今日のうちに帰ろうと思って取材をしたんで、食べる暇が
なかったんだ」(WRITER 改作)

6) 「もしかしたら、あなたは山田さんジャアリマセンカ?」「いいえ」

5)では、「顔色が悪い」ということからヒロシが「ごはん食べてない」という判断を
しようとしているが、判断の根拠がそれだけしかないことから、「ごはんを食べた」とい
う「～P」の可能性も意識したため「否定辞+カ」を用いた表現となっている。6)にお
いても「もしかしたら」を共起させることができることから、「あなたは山田さん」であ
るという判断の根拠が乏しく、「あなたは山田さんではない」という「～P」の可能性も
意識されていることが伺われ、それを「否定辞+カ」を用いて表現していると考えられ
る。

以上の四つの例から分かるように「～P」の可能性の意識というのは、話し手にとっ
て不確実な命題内容を持ち込んでいるということの意味している。その上で3)、4)で
は、自らに不確実ながらそのような判断ができそうであることを提示して見せている。
聞き手の存在を必要としない用法を「内向き」の用法と呼ぶことにすると、3)、4)の
ような「否定辞+カ」の用法は「内向き不確実判断提示」と呼ぶことができる。

一方、5)、6)は、話し手にとって確実でない命題に関して、そのように判断できそ
うだが、そう判断して良いかどうかを聞き手に問いかけている。「内向き」に対して、聞
き手の存在を必要とする用法を「外向き」の用法と呼ぶことにすると、5)、6)のよう
な用法は「外向き不確実判断要求」と呼ぶことができる⁹⁾。

「外向き不確実判断要求」について他に次のような例がある。

7) 「ちょっと来てくんナイカ? デッキまで」「はい」(JYOYUU)

8) 「よかったら、柘植さん、それに幸田さんも御一緒しマセンカ?」

「喜んで。しかし、ぼくなんかがお邪魔してよろしいんでしょうか」(SYO)

7)では「来てくれない」(～P)という可能性もあるが、「来てくれる」(P)という可能性もあり、そして「来てくれる」と判断して良いという期待を持って、その判断に関して聞き手に問いかけている。結果的に判断は聞き手に委ねられるわけで、それにより依頼の表現となっている。この文から「ナイカ」を取り「来てくれ」とすると、聞き手の判断の余地をなくすことになり、命令となる。8)は「よかったら」があることから「御一緒しない」(～P)という可能性を意識していることが分かる。そして、それでも「御一緒する」(P)という判断をしたいかどうかと聞き手に問いかけている。この場合もやはり判断は聞き手に委ねられることとなり、誘いの表現となっている⁴⁾。

2.2 認識生成

ここでは、意識されていなかった「P」の生成を表している「否定辞+カ」の用法を取り上げる。

- 9) 腕時計を見る。「もう、十一時近いジャナイカ。未だに連絡がつかないっていうのも、おかしいなあ」(消えた・やっぱり、p.296)
- 10) 「そうだ！FM局の取材なら、佐伯元編集長に頼めばいいジャナイカ？」
「いやあ、それはきついな、佐伯編集長には、俺、つらくて会えない」(NAZO)
- 11) 「それがさあ、私、お宅によくお邪魔するジャナイ。何度か、香里のお父さんにも会ってるよね」(理由・ミス、p.15)

9)は話し手が「未だに連絡がつかないのだから、まだ、遅い時間ではない」(～P)という意識を持っていた(したがって、十一時という特定の時間に対する意識も持っていなかった)が、「もう、十一時近い」ことに気が付いて発話した場面である。この発話によって話し手は「～P」を否定し、「もう、十一時近い」(P)という認識を話し手自身の中に生成するように提示しているのである。10)では「そうだ」があることで分かるように、話し手はそれまで「佐伯元編集長に頼めばいい」(P)ということに気づいていなかった(すなわち、「～P」であった)が、この発話により、その「～P」を否定し、「P」という認識を生成するように提示している。11)の場合、話し手自身に対してだけでなく、聞き手に対してもその認識が生成されるように提示されている。11)では、話し手はこれからする話の文脈に聞き手を導くために、聞き手が知っているがこの時点では意識していないであろう事柄「私がお宅によくお邪魔する」(P)を認識するよう聞き手に対して要求している。聞き手はこの発話まで「P」を意識していなかった(すなわち、「～P」であった)が、発話によってその「～P」が否定され「P」を認識するように促されている。このように、9)～11)はいずれも発話が「～P」を否定し「P」の認識を生成させている。三者は、話し手自身の認識を促すか、話し手と聞き手の両方の認識を促すか、聞き手の認識を促すか、という点で異なっている。ここで、9)のように話し手自身の認識を促す用法を「内向き認識提示」と呼び、10)のように話し手と聞き手の両方の認識を促す

用法を「外向き認識提示」⁹⁾と呼び、11)のように聞き手の認識を促す用法を「外向き認識要求」と呼ぶことにする。

ただし、「内向き認識提示」であるか「外向き認識提示」であるか判断の難しい場合もある。

- 12) (警察署の一室で黒星警部と竹内刑事が話をしている)

黒星は、清川の死体を前に、平然としていた三人の顔を思い浮かべた。

(黒星)「まず、息子の太郎から考えてみようジャナイカ」

「あの男、家を継ぐ気はあるのかな」

(竹内)「なかったようです。(以下略)」(不透明・密屋、p.60、()内は筆者挿入)

ここで黒星の最初の発話に対して竹内は答えていないので、ひとりごとのようにつぶやかれたと考えることができる一方で、やはり竹内に向かった発話で竹内が受け答えをしなかっただけであるとも解釈できる。前者の解釈を取れば、ここでの「～みよう」という認識を促すような表現は自分自身に対して発話されたものと考えられる。そして、この「ジャナイカ」は「内向き認識提示」の例となる。しかし、後者の解釈を取れば、この発話は話し手・聞き手両者の認識を促すために行われたということになり、「外向き認識提示」の例となる。

「外向き認識提示」と「外向き認識要求」の例をもう少しあげておこう。

- 13) 「今日の日曜、あの友達とよ、みんなで河原でサッカーやろうジャナイカ。どうだ？」

「だってー」(大人、p.195)

- 14) 「無名の画家らしいけど、いい絵ジャナイカ」

「うん、いい絵だが、……」(紙の女・待つて、p.74)

- 15) 「『レディ芸能』には、橋本という大記者がいるジャアリマセンカ。僕の出番はありませんよ」(SCOOP)

13)では話し手は「みんなで河原でサッカーやろう」という認識を自分自身と聞き手の両方が生成するように促している。むろん話し手はこの発話に至る前に「みんなで河原でサッカーをする」という考えを持っていたであろうが、ここではこの発話によって「自分と聞き手が協同で皆を集めて河原でサッカーをするんだ」という認識がこの場で新たに生成されているという点で、「外向き認識提示」の用法であると解釈する。「～やろうジャナイカ」は、このように話し手と聞き手の両者が「何かを一緒にする」という認識をその場で生成するように促す表現なのである。14)は話し手がその場で気が付いた「いい絵である」という認識を聞き手と共有しようという発話であり、やはり「外向き認識提示」の用法である。15)においては、聞き手が気が付いていないか、忘れていないか、重

要でないと思っている『『レディ芸能』には、橋本という大記者がいる』ということを知り、聞き手に認識させようとするので、これは「外向き認識要求」の用法である。

2.3 認識主張

ここでは、「～P」の破棄を表している「否定辞+カ」の用法を取り上げる。

- 16) なんだコイツ、けっこう軽いジャンナイカ。親輔は、なんだか理香を買いかぶり過ぎていたのかもしれないと思った。(GARO)
- 17) 一之助小さなハゼを釣り上げる..(略)
「なんだこりゃ。ハゼジャンナイカ。」(釣バカ6、p.149)
- 18) (美和子と千明がお見合いパーティに来ている)
「あなたの男を探しにきたんじゃないからね、美和子」千明が釘を刺した。
「私だって探してもいいジャンナイ。二万も出したんだから、二万も」
(男女上、p.25)
- 19) 吉原 「ほくの方がアイスクリーム買わなかったから」(略)「怒っていると思
って」
まり子 「どうして？」(略)
吉原 「男が買うのが常識だから」
まり子 「なにいったんの。どっちが買おうといいジャンナイ！」(大人、p.121)

16)では「理香を買いかぶり過ぎていたのかもしれない」と続いていることから分かるように、この時点まで親輔は理香のことを高く評価していて「軽くはない」(～P)という認識を持っていた。ところがこの時点でそうではなかったことに気づき、自分自身に対してその「～P」の認識を破棄するように促しているのである。17)は、ハゼではない大物をねらっていた一之助が、釣り上げてみると小さなハゼがかかっているのを見てがっかりしている場面である。一之助は釣り上げるまではそれが「小さなハゼではない」というつもりでいた(すなわち、「～P」の認識を持っていた)が、釣り上げてみると小さなハゼであったため、この発話でその「～P」の認識を破棄しているのである。18)では「美和子はこのパーティーで男を探してはいけない」(～P)という千明の認識に対して、美和子が「私もこのパーティーで男を探してもいい」(P)と示すことで、千明の認識(～P)が破棄されるように促している。19)は、「アイスクリームを買うのは男でも女でもどちらでもいい」(P)と思っているまり子が、その認識と異なる「男が買うのが常識である」(～P)という吉原の認識が破棄されるように促している場面である。このように16)～19)の例はいずれも「否定辞+カ」によって「～P」の認識が破棄されるように発話されたものである。ただし、「～P」の認識を持っていたのは、16)、17)では話し手で、18)、19)では聞き手である。そして、18)、19)の例から分かるように「～P」の認識が破棄されるように促す発話は、聞き手に対して話し手の認識を強く主張するように

響く。そこで、18)、19)に見られる「否定辞+カ」の用法を「外向き認識主張」と呼ぶことにする。これに対して16)、17)は、話し手が自分自身に対してそれまでの「～P」の認識を捨て「P」の認識をするように強く促すものであるので、このような「否定辞+カ」の用法を「内向き認識主張」と呼ぶ⁶⁾。

「内向き認識主張」と前項の「内向き認識提示」とは連続した用法であり、両者の違いは話し手の認識がどのように処理されたのかによる。

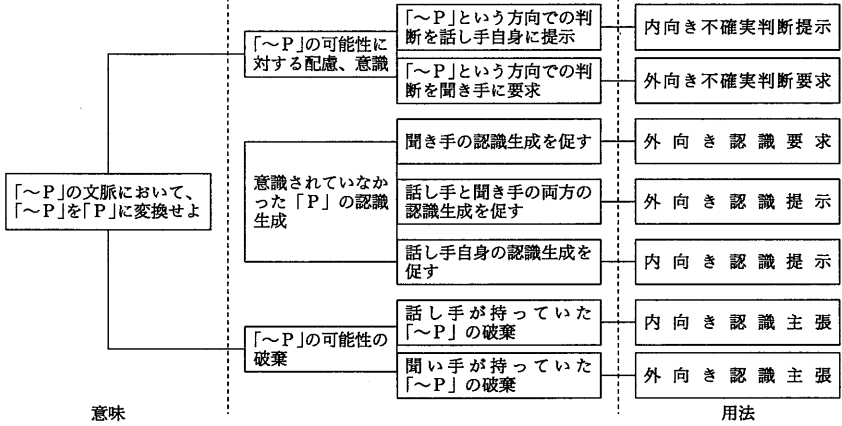
20) (あるパーティー会場で太郎を見かけて) 太郎がいるジャンイカ。

20)が、誰が招待されているかまるで分からないパーティーで、話し手も誰が来ているか分からないし、誰か特定の人に会うことを期待していない状況で発話されたのであれば、話し手は「太郎に関して、いるという認識もないという認識も何も持っていなかった」(～P)ことになる。その状況で太郎を発見して、「太郎がいる」(P)という認識を生成した場面であるとすると、これは「P」の認識を生成するのに主眼が置かれているので「内向き認識提示」の用法と解釈される。ところが、例えば、話し手は太郎とけんかをしていて太郎には会いたくないと思っている状況で、太郎は絶対に来ないと聞いて話し手がそのパーティーに来たとすると、太郎を見かけた話し手は「太郎はいない」(～P)という認識を破棄するようにこの発話をしたと考えられる。この場合「～P」の破棄に主眼が置かれているので「内向き認識主張」の用法であると解釈できる。このように同じ発話であっても「内向き認識主張」と解釈される場合と「内向き認識提示」と解釈される場合とでは、話し手の認識の捉え方の違い、すなわち、「～P」の認識の破棄に主眼をおくか、「P」の認識の生成に主眼を置くかによって異なるのである。

3. まとめ

本研究では、従来の否定疑問文の用法研究が「ジャンイカ」のみに偏っていたのに対して、「ジャンイカ」と「ナイカ」を合わせて「否定辞+カ」という形式にまとめた考察を試みた。また、先行研究においては、各用法の特徴を示して名称を付けただけであったが、ここでは「否定辞+カ」が否定辞を含みながら命題を否定しないという特異な表現形式であることから、「否定辞+カ」が発話時における「～P」の捉え方と「P」の導入のあり方を問題とする形式であり、その意味を「～P」の文脈において、「～P」を「P」に変換せよ」であると考えられることができること、そしてこれによって「否定辞+カ」の用法を体系的にとらえることが可能であることを示した。本論で示した七つの用法⁷⁾の派生過程は次のような図で示される。

図 「否定辞+カ」の意味と用法の派生過程



【注】

- 1) 田野村(1988:28)の表では、分析的な否定疑問の「ではないか3」についても記されているが、本研究では扱わないのでその部分は割愛した。
- 2) 「ジャナイカ」と「ナイカ」には、「デハナイカ」「ジャナイ(?)」「ナイ(?)」などの変種が存在するが、ここでは「否定辞+カ」という時に、それらも含まれているものとする。
- 3) 三宅(1994)は、本研究の「内向き不確実判断提示」を「推測」、「外向き不確実判断要求」を「命題確認の要求」と呼び、確認要求の表現は「推測」を表すということから派生的に表される意味であると考え(p.19)と述べているが、「推測」がどのように派生して確認要求の意味になったのかの説明はない。本研究ではこの二つの用法がどちらも話し手の命題に関する不確実な判断と関係していることを示すことで、両者の関係を明らかにしている。
- 4) 田野村(1988)は、本研究の「内向き不確実判断提示」を「推定」と呼び、相手の行為を誘発するための表現(勧め、誘い、依頼)と連続的であるとしている。その根拠として、双方の性格を合わせ持つ中間的なもの(「行って見たくないか?」「ねえ、きれいだと思うわない?」)があり、それらは相手の考えや希望を尋ねているとも言えるし、それを特定の方向へ導こうとしているとも言えると述べている。本研究では「誘い」「依頼」表現は「外向き不確実判断要求」の用法で使われた結果生じたもので、「内向き不確実判断提示」と同様、話し手の命題に関する捉え方が問題となる表現であると考え。そして、二つの用法は連続的であるというより、話し手の命題に関する捉え方としては同じものが発話時における条件により二つの用法になったものと考え。
- 5) 「外向き」の定義は「聞き手の存在が必要である」というものである。「外向き認識提示」は、話し手と聞き手両方の認識を促す用法であり、聞き手の存在なしには成立しないので、用法名に「外向き」を付けてそのことを示した。
- 6) 「内向き」の場合「主張」という言葉は違和感があるかもしれないが、ここでは各用法の関連性を明確にすることが一つの目的となっているので、今の場合「外向き認識主張」用法との平行性を重視してこの名称を付けることにした。
- 7) 本研究では1.で述べた先行研究とは異なる方法で各用法を提案したため、用法の定義も、それによって決まる各用法のカバーする範囲も異なるが、比較参考のため、本研究が提案した用法とほぼ一致していると思われる三宅(1994、1996)の用法を示しておく。

本研究が提案した用法	三宅(1994、1996)が提案した用法
I 内向き不確実判断提示	推測
II 外向き不確実判断要求	命題確認の要求
III 内向き認識提示	—
IV 外向き認識提示	弱い確認要求
V 外向き認識要求	知識確認の要求・潜在的共有知識の活性化
VI 内向き認識主張	驚きの表示
VII 外向き認識主張	知識確認の要求・認識の同一化要求

【引用文献】

- 安達太郎 1991 「いわゆる「確認要求の疑問表現」について」『日本学報』10 大阪大学文学部
 ——— 1992 「「傾き」を持つ疑問文—情報要求文から情報提供文へ—」『日本語教育』77 日本語教育学会
- 井上優 1994 「いわゆる非分析的な否定疑問文」『国立国語研究所報告107 研究報告集15』秀英出版
- 田野村忠温 1988 「否定疑問文小考」『国語学』152 国語学会
- 蓮沼昭子 1993 「日本語の談話マーカー「だろう」と「じゃないか」の機能」『第1回小出記念日本語教育研究会論文集』
 ——— 1995 「対話における確認行為「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法」『複文の研究(下)』仁田義雄編 くろしお出版
- 三宅知宏 1994 「否定疑問文による確認要求的表現について」『現代日本語研究』1 大阪大学現代日本語講座
 ——— 1996 「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89 日本語教育学会

【例文出典】

朝日 = 「電子ブック朝日新聞・天声人語社説1985-1991年(増補改訂版)」日外アソシエーツ/大人 = 『大人になるまでガマンする』山下太一 大和書房/紙・待つて = 「紙の女」『待つている男』阿刀田高 角川文庫/消えた・やっぱり = 「消えた輝き」矢島誠『やっぱりミステリーが好き』講談社文庫/第三・ミステリー = 「第三の罣」三好徹『ミステリー大全集』赤川次郎編 新潮文庫/男女上 = 「男女七人秋物語(上)」鎌田敏夫 角川文庫/釣バカ 6 = 「釣バカ日誌6」『シナリオ』1994年3月号 シナリオ作家協会/眠り = 「眠りを殺した少女」赤川次郎 角川文庫/不透明・密室 = 「不透明な密室」『密室殺人事件』角川文庫/理由・ミステリー = 「理由なき反抗」『ミステリー大全集』赤川次郎編 新潮文庫/GARO = 「画廊へようこそ」新美康明 イースト文庫/JYOYUU = 「ぼくは女優を恋をしたい...すばらしき映画作りの仲間たち」横堀幸司 イースト文庫/NAZO = 「謎とき編集者...恋・冒険・ミステリー」佐藤裕恒 イースト文庫/SCOOP = 「芸能記者スコープの罣」金沢誠 イースト文庫/SYO = 「ぼくは小説家になった」司悠司 イースト文庫/WARU = 「ワルのり旅行」眉村卓 角川文庫/WRITER = 「ライターの話」小野頼健人 イースト文庫

(カノックワン ラオハプラナキット 筑波大学大学院 博士課程 文芸・言語研究科応用言語学)